もうひとつの日本地図（２）

何者にもならないで何かをする人

―カンジョンのマドンナ、チェ・ヘヨンさん―

←カンジョンの海でカヤックに乗り「セウォル号を引き上げて、真実を引き上げて」と書いた旗を広げているチェさん達。（写真提供：チェさん）

田 恩伊（チョン ウニ）

カンジョンのマドンナ

「クロンビ　風が吹く」日本自主上映会は、まるで奇跡のように何一つ問題もなく盛況に終わった。自主上映会を進めるために募金や寄付なども一切呼びかけたりはしなかった。上映に手を挙げてくれた人々とグループ自体が寄付のようなものだったと思っている。ツアーが終わってからの上映を含め全国 20 カ所近くの上映が終わった。これをもって今後の新たな展開と未来のために私たち事務局は最後の役割を果たす必要があると合意した。上映会で集められた寄付金と物販のお金を、銀行に振り込むことも出来たはずだが、カンジョンに行って直接渡すことにしたのである。カンジョン訪問を呼びかけると水俣の高倉敦子さん、実行委員であり事務局を務めていた「モモの家」の松村志保さんが手を挙げてくれた。

ところが、私たち３人が水俣、大阪、ソウルというそれぞれの場所から出発して合流しなければならないのに、中々日程が決まらなかった。最後に７月 17 日（金）から７月 20 日（日）という日程を固めることができたが、台風の影響で志保さんが予定通りに出発出来なくなり、結局 24 時間ギリギリの滞在となった。済州―大阪を往復した歴代の人たちの中で最短時間の滞在を記録していたかも知れない。志保さん、本当に有り難う！　この時の済州・カンジョン訪問については、高倉さんが「クロンビ　風が吹く」自主上映会実行委員会のフェースブック（Facebook)に詳しく報告している。
https://www.facebook.com/groups/gureombi2015/permalink/380814115446579/

前々回の連載「標的・圧殺・陵辱の地、沖縄・済州」（2015 年５・６月号、No.187）に、私は上映会を終えて今後実行してみたいという三つの項目を取りあげた。第一に、自主上映に手を挙げてくれた人たちと済州に行ってみたいこと。このことについては、とりあえずは３人の訪問で小さなスタートを切ったと考えている。

第二に、済州・カンジョンに住みながら活動している若者たちを日本で同じく活動しているグループや人々と出会わせ、友達になる機会をつくること。そこで、今日はこれを実行する前置きとして、あるカンジョンの若者を紹介しておきたいと思う。今回の訪問では、カンジョンで平和センターのオープンを準備していた先輩にも会ったが、彼女はその若者を「カンジョンのマドンナ」と呼んでいた。上映期間中、物販関係のことでずっと私たちに対応してくれたチェ・ヘヨンさんのことである。彼女はカンジョンの若い活動家たちがつくった「カンジョンの友達（Gangjeong Friends)の事務局長を務めている。

「日常」が支える安心感

私が彼女に最初に出会ったのは今年の３月である。上映会を始める前に現場の「今」をもっと詳しく把握しておく必要があるということから、私が実行委員を代表してカンジョンの下見に行くこととなった。皆にオープンされている村であり、公会堂のようなマウル会館に行けば、きっと誰かに会えるはずだったので、特に前もってアポは取らなかった。何かのために、目的のためにというよりは、ただカンジョンの日常を静かに見て回りたいという気持ちもあった。「毎日のミサ」は１日も欠かさず同じ場所で何年も続いているし、 サムゴリ食堂に行けば、毎日共同食事をしている皆に会えるはずだ。私にはどこかそうした日常に対する信頼感があった。 共同体に対する安心感は、何気なく規則的に繰り返されている小さな「日常」から大きく起因する。唐突、無計画、不規則が生み出す創造性・創意性は、実はこうした小さくつまらないように見える「日常」の支えがなければ容易には生まれてこないものである。

まずはサムゴリ食堂へ向かった。丁度ミサが終わった時間だったので、食堂はかなり多くの人で賑わっていた。懐かしい顔ぶれも何人か座っている。突然現れた私に彼らの一人は「あっ、隠れ忍者があらわれた」と冗談を飛ばした。皆は笑いながら誰にでもいつでもそうしてきたかのように私を迎え入れてくれた。私は一緒に食事をしながら映画上映のことや物販の話しをした。いろんな意見や反応があったが、カンジョンのグッズなどを管理する人として皆がチェさんの名前を言ってくれた。

チェさんはカンジョンの隣町に住んでいる。もともとはカンジョンの一角で雑魚寝をする生活だったが、隣の町に小さな部屋が借りられるようになり、前より進歩したという。丁度その日はクロンビが爆破・破壊されて三周年を迎える痛ましい記念日だった。2011 年、政治的に偏った司法的な判断から基地建設阻止は事実上敗北してしまった。戦いの目標と意味を失ってしまった多くの運動団体や、応援していた人々が現場を離れ自分たちの日常に戻って行った。そして、毎日のように活動家は拘束され、罰金が処せられた。時にはお祭りのように元気づけてくれた戦いは沈滞し、その中を生きる一人一人の中に暗い陰を落としていたに違いない。しかし、そうした中からもカンジョンを離れないで深い傷と残された現実問題に立ち向かいながら「平和」を土台にする共同体を再生し創造しようとする人々が残った。彼らの中にはカンジョンの未来に自分たちを託そうとする若者たちもいた。チェさんもその中の一人だった。私はクロンビ破壊三周年の準備と街道行進を終えて待ち合わせの場所に来てくれたチェさんと一緒に彼女の小さな住処へ向かった。

夏の日差しで十分に日焼けした茶色の顔は、透き通った瞳によく似合っていてどこか生き生きと輝いていた。運動でもしているだろうか、大きな存在感を感じさせる体格をしていた。案内してくれた彼女の家は、以前は農作業用の道具をおいたりする倉庫のような気がした。そこをコンクリートで整備して独立した小さな部屋をつくった感じだった。部屋が小さく最近忙しくて掃除もしてないので部屋には入ってい

↑カンジョンで座り込みをしているチェさん。（写真提供：チェさん）

ただけないですよと言いながら、それでもやっと自分の独立した空間が出来たと彼女はすがすがしい顔で笑っていた。入ってもらえなくて申し訳ないと何度も言いながら彼女は部屋のあちこちから幾つものの箱を取り出して、カンジョンのグッズなどを詰めてくれた。持ち帰りが出来る程度に荷物を収め、彼女にバス停まで送ってもらった。

一緒に歩き、バス停でバスを待ちながら－20分も経たない短い時間だった－私は幾つか彼女に話を聞き、また聴いた。出来ればこれからも済州島に住みたいと考えている、「カンジョンの友達」の事務局長を務めているからわずかではあるけど一応収入はある。それだけでは生活が出来ないから、ミカン畑でミカンを採ったり、ビニールハウスのイチゴを採ったりする日雇いのアルバイトをしている。済州島は自然が豊かだし、そのような仕事はよくあるので今のところ生活には困らない。何を基準にして困る・困らないかの判断はそれぞれ違うと思うけど。自然と共に生きることが好きなので畑の仕事とか農業にも関心がある。自分は元々韓国文学を専攻していたので、大学院にも入って済州の民俗信仰や神話などを勉強したいとも思っている。カンジョンの活動から済州島に居残ることを決め、今後もここに定住しながら、何らかの形で共に生きることを工夫しながら「平和教育」に専念して生きたいと思っている若い仲間が周りには二十数人はいると思う ・・・。

何者にもならないで何かをする

彼女の話を聴いている間、私はどこか物悲しい気分になっていた。これまで日本や韓国で、このような経験と夢に輝いている若者たちが生き生きと成長していくのを受け入れ、支えてあげられるような社会システムに出会ったことがほとんどない。それに似たようなものがあるとするならば、大きなボランティア団体か宗教関係のシステムの中だろう。あるいは、人生全体のコミットを求める共同体などには存在している可能性がある。そうしたシステムにはいることを彼らが望んでいるかどうかは別の問題にしても、彼らを支える社会的装置や支援があるとしても、それが主流ではないことは確かである。

ソウルに戻っていく飛行機の中で、私は彼女の透き通った瞳と夢を語る表情、どこかに敗北の陰が漂うカンジョンの風景、着々と工事が進んでいるクロンビの現場、そして雨上がりに美しく輝いている無数のオルム（＊小さな火山、済州島には 360 ある）を幾度も思い浮かべた。不条理は私たちの日常を支配している。しかし彼女はどこかでこう語っていた。「私が考える平和というものは、不当で無辜（罪がないのに）に抑圧され、人々が悔しい思いをしない状態です。ですから平和と正義は切り離しては考えられないものだと思います。正義が崩れかけているところを見ていると、私の中から平和のことをもっと真剣に考えるようになります」。

何と彼女は踊りが好きなようである。今年のカンジョン平和大行進を報告する写真の中には、彼女が夢中になって踊る素敵な姿が何度も写っている。彼女がいろんな才能の持ち主であることは、彼女のフェースブックの活動を覗きながら詳しく知るようになった。今カンジョンは、済州に限らず、韓国のあちこちで「崩れかけている正義」に抵抗し、実践的に生きようとする人々の象徴的な場になりつつある。セウォル号やミリャン（密陽）の送電塔建設反対、双龍自動車の労働者ストなど、不当に抑圧された人々との連帯がもち続けられている。一方では生活の面からもう一つの平和な「日常」を創って行くことが工夫されているようである。

彼女は、頼もしい海女さんのように時々仲間たちとカンジョンの海にもぐっているらしい。また何日も続けて刺繍をするしとやかな姿も持っている。平和をテーマにして彼女が創った刺繍作品はなかなかの傑作だった。マルシェなどに持っていって物々交換をしたり売ったりもしているらしい。植物の種を守る勉強会に参加し、GMO についても学習している。済州の神話や物語を勉強し古くから伝わる済州料理も学ぶ。そう、彼女は済州の人より済州人らしく生きているのである。こうした彼女の生活全般、生き方を見守りながら、私は何度も思ってしまう。彼女、彼女たちが同じように輝いている日本の若者たちと結ばれ、共に育っていく世界が見てみたい！　だから、私たちの世代が彼らの良い土壌として働いていけますように！　そして彼らが力強く飛び立つ信頼できる踏み台になりますように！　と。

今年は彼女が済州に入って四年目になるそうだ。この素敵なカンジョンのマドンナは、どこかに自分についてこう書いていた。「泣き虫、頻繁にロマンチスト、じゃなく実はプロのファイター」。ある若者たちの文化グループと行った彼女のインタビュー内容の一部を紹介しながらこの文を締めくくりたい。

（※私の一存で一部を編集しています）

私が平和について関心を持つようになったのは、2009 年の済州平和紀行の時でした。その時に初めてカンジョンという所に行きました。2011 年に一人で済州島を旅する機会がありましたが、カンジョンに行ってみると鉄のフェスがあちこちつくられていて、この戦いは未だに続いているのかと妙な気分になりました。それから何日か経ちましたが、クロンビを爆破する日が決まったという話しと、それを阻止しようとしているが人が少ないので応援に来て下さいというツイーターを見ました。何となく自分が行かなければならないと言う気がしてきました。… 大学 1 年の時にある先生が話した“歴史に無賃乗車してはならない”という言葉が思い浮かんできたのです。

当時、私は任用試験を準備していた受験生で自炊をはじめたばかりの身軽さもあって、自分のような人がその現場を見て感じたことを証言しなければならないと思ったわけです。それ以前は、私は一度も集会やデモ、戦いの現場に参加したことはありません。当時私は、なぜか自分のような人がもっと多く集まってくれればクロンビの爆破を阻止できるような気がしました。（中略）しかし、その日私は到底理解出来ない凄まじい夜を目撃しました。1000 人もの越える警察と対置しながら合理的・理性的には理解出来ない状況を自分で直接経験したのでした。私はそうした現場を見ながら、そこを守ろうと戦っている人々、キリスト教の関係者たちは一体何のためにあれだけ身を投げているのだろうか、彼らが求めている生命と平和というものは一体何だろうかと考えはじめました。あまりにも不当に押しかかってきた公権力、国家暴力の恐ろしさに震えながら、どんどんカンジョンに自分の心を引っ張られていたのです。「野蛮の夜」でした。（中略）

今は多くの絶望の中で自分の心の悲しみをどのようにして乗り越えていけば良いのかよくわからなくなる時もあります。ですから、こうした私たちに皆さんはこれからも関心を持ち続けて下さい。カンジョンに基地が建設されたとしても、私たちが語り続けてきた平和というものが、無効になることはありえません。私たちが語り続けてきたことが、基地が建設されたからと言って平和ではなくなり、建設されなかったから平和であるということにはなりません。（中略）これからも自分で見て感じてきたことを、生き方として語り続けて行きたいと思います。

あなたの夢は何ですかと聞かれると、私はこう答えます。「私の夢は何者にもならないで何かをする」ことだと。両親にとってはがっかりしてしまう、答えの無い娘に見えるかも知れません。しかし、今私は何者にもならず多くのことをやり遂げています。

（※今回はカンジョン訪問報告にしました）

夏の日差しが照りつける中、基地ゲート前での毎日ミサに参加。↑
＊写真提供・チョ・ソン・ボン監督